フェルメールの名画を扉とした「一七世紀グローバリゼーション」への誘い

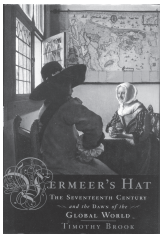
本野 英一

中国に関心を抱く人を対象としている本誌に『フェルメールの帽子』なんていう書物の紹介記事が掲載されるなんて、何かの間違いじゃないのか。そう思う人もいるかもしれない。しかしこれは、明末中国と、中国を目指して悪戦苦闘したヨーロッパ人を扱った、立派な中国文化史、一七世紀の東西交流史の研究書なのである。

昨今の日本でのフェルメールブームはすさまじい。その人気は、今やレンブラントを上回ると言っても過言ではない。フェルメールを扱った書物や雑誌記事も少なくない。その中には、小林頼子教授の『フェルメール論――神話解体の試み』（八木書房、一九九八年）、同『フェルメールの世界――一七世紀オランダ風俗画の軌跡』（NHKブックス、一九九九年）、同『牛乳を注ぐ女――画家フェルメールの誕生』（ランダムハウス講談社、二〇〇七年）のような優れた学術書、啓蒙書もあるが、ひどいものになると、どこかのルポライターや、お嬢さん作家が、わずか三十数点のフェルメール全作品（但し、一九九〇年にボストンのイザベラ・ガードナー美術館から盗まれて杳として行方が分からない『合奏』は除く）を所蔵している西洋各地の美術館を見て回った時の感想を、フェルメール作品の図版に添えただけのやっつけ仕事までである。そんなものでも結構な売れ行きというから驚きだ。

海の向こうのアメリカやヨーロッパも事情は似たりよったりで、フェルメールを題材にした美術書や小説、映画やテレビドラマが相次いで公にされている。私が本書と巡り合ったのは、今年の二月、ワシントン郊外にあるアメリカ国立公文書館に史料収集に出かけた時であった。ワシントンに到着したのがちょうど週末であり、公文書館が開かないのを幸い、地元の国立絵画館（ナショナルギャラリー）に出かけ、ここにある四点のフェルメール作品（といっても、『フルートを持つ女』は、後代の模作と認定されてしまったし、傑作『赤い帽子の女』も小林教授によれば偽作であるというが）を、初めて見ることができた。その後、地下にある美術書コーナーを冷やかし、新刊書コーナーに平積みされていたのが、刊行されたばか

Timothy Brook
Vermeer's Hat: The Seventeenth Century and the Dawn of the Global World



Bloomsbury Press, 2008

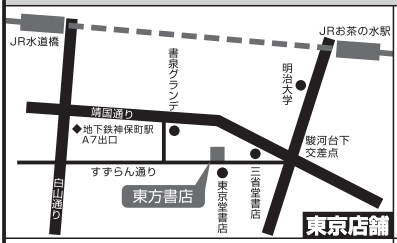
りの本書である。普通なら、あっさり通りすぎてしまうところだが、見覚えのある研究者の名前が著者名にあるのが目にとまり、思わず本を手に取って扉を開いてみた。

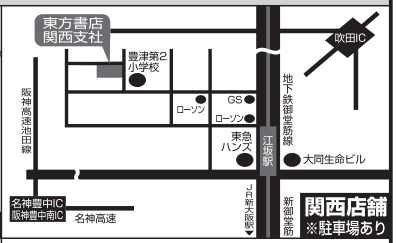
直感は当たっていた。本書は、世界的な評価を得た明末商業文化の研究、*The Confusions of Pleasure: Commerce and Culture in Ming China*（University of California Press, 1998）、あるいは天安門事件を扱った、*Quelling the People: The Military Suppression of the Beijing Democracy Movement*（New York: Oxford University Press, 1992）や最近は日中戦争期の対日協力者を扱った *Collaboration: Japanese Agents and Chinese Elites in Wartime China*（Harvard University Press, 2005）といった問題作を次々と刊行するカナダきっての中国史研究者の最新作だったのである。早速、一冊を買い求め、帰国する飛行機の中で読み始めた。

本書は、読者をフェルメールの作品中六点を、一七世紀前半期のグローバリゼーション状況に誘う扉として扱った優れた歴史絵巻である。取り上げられているフェルメール作品は、①『デルフト眺望』（デン・ハーグ、マウリッツハウス美術館所蔵）、②『士官と笑う娘』（ニューヨーク、フリック・コレクション所蔵）、③『窓辺で手紙を読む娘』（ドレスデン、国立絵画館所蔵）、④『地理学者』（フランクフルト・アン・マイン、シュテーデル美術研究所所蔵）、⑤「天秤を持つ女」（ワシントン、国立絵画館所蔵）、⑥『マリアとマルタの家のキリスト』（エディンバラ、スコットランド国立絵画館所蔵）であり、⑥以外は全てカラー図版が付けられている。残念ながら、この書評が出る頃に東京で開催されている八年ぶりのフェルメール展（八月二日～一二月一四日、東京都美術館）に出品されているのは、⑥のみである。

といっても、③は三年前の「日本におけるドイツ年」の一環として開催されたドレスデン美術館展でも来日していたし、はるか以前、一九七五年に日本で初公開されたフェルメール作品だった。また、④と⑤は八年前に大阪で開かれたフェルメール展で展示公開されたから、

中国関係専門店 **東方書店〔店舗のご案内〕** ご来店をお待ちしております





地下鉄神保町駅●半蔵門線・都営三田線、新宿線A7出口より徒歩1分／JR御茶ノ水駅●御茶の水橋口より徒歩10分

地下鉄江坂駅●5号出口より徒歩5分（JR新大阪駅より地下鉄御堂筋線で2駅目）

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3
TEL:03-3294-1001／FAX:03-3294-1003
営業時間：10時～19時（月～土）/12時～18時（日祭）

〒564-0063 大阪府吹田市江坂町2-6-1
TEL:06-6337-4760／FAX:06-6337-4762
営業時間：10時～18時/土日祭休

読者諸氏の中にも既に御覧になったことのある方も多いと思うが。

フェルメール作品を対象とする美術史研究ならば、作品の成立時期、そのテーマや構図、あるいは作者その人が置かれていた歴史状況等が問題になるのであろうが、ここで著者が問題にしているのは、上記六点の作品の背景や小道具となっている帽子や陶磁器の皿、銀貨、あるいはモデルとなった人物の服装なのである。

本書は、漱石の『草枕』を思わせる叙述で始まる。一九七一年の夏、当時二〇歳だったティモシー・ブルック青年は、アドリア海からスコットランドへと抜ける旅に出た。アムステルダムで買った自転車に乗って低地地方を抜ける途中で雨に降られ、対向車線からやってきたトラックをよけようとして水たまりに転倒して泥まみれになり、近くの家にしばしの雨宿りを求めた。一部始終を見ていた親切な未亡人の好意で、無料で夕食と風呂の提供だけでなく一夜の宿の提供まで受けたブルック青年は、翌朝別れ際に、この未亡人からこの土地の風景の絵葉書を何枚か記念品にとっておけと手渡され、その中の幾つかを見に行ってみろと促された。その土地こそ、フェルメールの生まれたデルフトだったのであり、何枚かの絵葉書の一枚に写っていたのが、フェルメールが埋葬された旧教会だった。これが著者とデルフト、そしてフェルメールとのなれ初めである。

この後著者は読者を、フェルメール作品を扉に一七世紀前半の世界へと誘って行く。最初に登場するのは、プルーストの『失われた時を求めて』にも引用された、ヨーロッパ風景画の最高傑作の一つ、『デルフト眺望』である。ここで著者がまず注目しているのは、絵の中に描かれた、運河の向こう岸に修理中のために停泊していたマストの無い船である。著者によれば、この船は、ニシン漁に出ていた船なのだそうである。なぜ、こんな船がこんな所に停泊していたのか。それは、この時代の世界的な「小氷河期」と関係がある。「地球温暖化」におののく現在とは正反対に、当時は世界的な気候寒冷化の時代であった。北極の氷が増えた影響で、ニシンの群れが南下したために、オランダ漁業が隆盛を迎え、その漁船が画家の目に留まったのである。オランダ沿岸にニシンの群れを追いやった気候寒冷化は、同時に一五七〇年代から一六六〇年代にかけて世界でペストを大流行させ、ヨーロッパで多数の死者を出した。それだけでなく、中国では李自成の乱と明王朝崩壊をもたらした冷害を引き起こしたのである。

この作品には、オランダと中国を結びつけるものがもう一つある。それが、左側に描かれた建物の赤い屋根である。これは、オランダ東インド会社（VOC）の保税倉庫なのだそうだ。デルフトはオランダ東インド会社の拠点の一つであり、ここからは、本国に居ても大した暮らしが期待できなかった無数のオランダ人がオランダ東インド会社の商船の乗員となってアジアに向かって行った。そしてその多くは、二度と故郷の地を見ることがなかった。

当時のオランダは、宿敵スペイン－ハプスブルグ帝国とアジア貿易の覇権を

競っており、その究極の目的地は中国であった。本書は、中国への交易ルート開拓の情熱に駆り立てられて、北米大陸五大湖北部沿岸地帯からハドソン湾一帯を探検し、先住民族との交戦、交易を行なったフランス人探検家の活動が第二章で扱われる。この探検家によってヨーロッパに持ち込まれたのがビーバーの毛皮であり、これが本書の表紙を飾る『士官と笑う娘』に後ろ姿だけが描かれたオランダ士官の帽子の素材になったのだという。当時のヨーロッパ人の中国に対する憧れがどれほど物凄いものだったかは、本書にカラー図版が引用された、デルフトのランベート・ファン・メールテン美術館が保有するデルフト製の陶磁器の大皿によって例証されている。これは、中国からもたらされた多くの陶磁器に描かれた絵画から得られたイメージをヨーロッパ人が独自の想像力によって再現したものである。

本書を読んでいちばん驚かされたのは、中国陶磁に描かれた空間処理の技法が、『デルフト眺望』に見て取れるという、著者の指摘である。実証出来る根拠は、今のところ見つかっていないが、フェルメールがデルフトに持ち込まれた無数の中国陶磁の装飾技法からヒントを得ていた可能性は否定できないのだという。

『窓辺で手紙を読む娘』に描かれた、果物を盛った中国陶磁の皿、世界中からオランダ商船が持ち帰った情報を地図に落として行く作業中の地理学者を描いたのであろう、『地理学者』などを狂言回しに、著者は史上初めて実現した、新大陸を含めた海路による東西交易の姿と風前の灯火となっていた明代中国の権力者、士大夫知識人を描く。この時代を象徴する商品として著者が取り上げているのは、タバコと銀である。国際通貨となった銀地金、あるいはスペインドル銀貨の重要性は、日本の歴史研究者にとって周知の史実であるが、タバコが東西社会に受け入れられて行く過程の描写は、他の類書には見られない、大変興味深いものである。

本書を読むと、フェルメールの名画が、新大陸を含めた歴史上初の海路による東西交易の本格化を抜きにしてはあり得なかったことが、今さらながらよく分かる。しかし、それは、決して人類全体を幸福にするものではなかった。二一世紀初頭のそれと同様に、一七世紀前半期の「グローバリゼーション」も、わずか一人の富豪を産み出すために、九九人の生活を困窮化させるものだったのである。

本書刊行直前に行われたインタビュー（http://www.essentialvermeer.com/interviews_newsletter/brook_interview.html）の一節で、著者は、この時代と現代との類似性を強調し、ただ主たる違いはそのスケールだけにすぎないと言い切っている。見るものを陶酔させる名画の背後には、身の毛のよだつような戦乱と残虐な現実があった。その現実を忘れる訳にはいかない。そんなことを読者に思い出させてくれる、東洋史学者の手になるフェルメール論である。そのあざやかな手腕と博識には、脱帽するほかない。

（もとの・えいいち　早稲田大学）